



創作者向け利用ガイド

ペルソナ図鑑を「人間描写資料」として使う方法

創作において最も難しいのは、「人間を書くこと」です。

設定を作ることはありません。職業名を付けることでもありません。本当に難しいのは、「この人、本当に存在しそう」と読者や視聴者に感じさせることです。

しかし実際の創作では、職業設定だけ借りた空虚なキャラクターになりがちです。例えば、「医者だから冷静」「営業マンだから話し上手」「エンジニアだから無口」といった、表面的な記号だけで人物を構成してしまうことがあります。

ですが現実の人間は、もっと矛盾しています。

明るい接客業でも裏では感情疲労を抱えていたり、論理的な技術職でも妙なこだわりを持っていたり、福祉職でも人間嫌いになりかけていたりします。人間らしさは、そうした「職業と感情の摩擦」から生まれます。

このペルソナ図鑑は、そうした「人間の摩擦部分」を描くための資料です。

この資料には、単なる仕事内容だけではなく、初期の失敗、職業病、健康問題、思考癖、日常感覚などが含まれています。つまり、「その仕事を続けることで、どんな人間になっていくのか」という変化まで扱っています。

創作でリアリティが消える原因の一つは、「職業が背景化すること」です。

例えば、「刑事」という設定だけがあり、その人物が夜勤でどれほど生活リズムを壊しているのか、どんな言葉に過敏なのか、どんな瞬間に疲れるのかが存在しない場合、読者は無意識に薄さを感じます。

逆に、職業特有の小さな癖が入るだけで、キャラクターは急激に立体化します。

- ・無意識に専門用語で考える
- ・日常会話でも仕事脳が抜けない
- ・職業特有の疲労を抱える
- ・新人時代の失敗を引きずっている
- ・一般人との感覚ズレがある

こうした細部が、「この人物は生きている」という感覚を作ります。

特に、漫画、ドラマ、舞台、映画、小説、ゲームシナリオ、動画脚本など、「会話で人物を見せる作品」ほど、この差が大きくなります。

また、この資料は「主人公作成」だけでなく、「脇役強化」にも役立ちます。



ペルソナ図鑑

創作では、主人公より脇役の薄さで世界観が壊れることがあります。店員、上司、同僚、医師、警察官、配達員、教師など、短時間しか出ない人物でも、「その仕事をしている人間らしさ」が入るだけで、作品全体の空気が変わります。

さらに重要なのは、「失敗」が書かれている点です。

創作初心者ほど、「有能キャラ」を作ろうとします。しかし読者が感情移入するのは、失敗経験を持つ人物です。新人時代のミス、思い込み、勘違い、身体疲労、空回りなどがあることで、人間臭さが生まれます。

そしてもう一つ重要なのは、この資料を「そのまま使わないこと」です。

この資料は、完成キャラクター集ではありません。「人間を考えるための素材集」です。例えば、複数職業の特徴を混ぜても構いません。真面目な技術職に接客業的コミュニケーション能力を加えてもいいですし、医療職の共感疲労を別職種キャラに応用しても構いません。

創作で重要なのは、「現実をコピーすること」ではなく、「現実らしく錯覚させること」です。そのため、この資料は設定辞典ではなく、「人間観察補助ツール」として使ってください。

また、創作者が陥りやすい問題として、「自分の知っている人間しか書けなくなる」というものがあります。すると、どの作品にも似た人物ばかり登場するようになります。この資料は、その偏りを崩すためにも使えます。

世の中には、自分とはまったく違う生活リズム、思考回路、疲労感、誇りを持って働いている人たちがいます。その感覚を知るだけで、キャラクターの幅は大きく広がります。最後に、創作で最も危険なのは、「設定だけで人物を書いた気になること」です。

人間は、職業名では動きません。疲労、失敗、癖、焦り、誇り、生活習慣、身体感覚によって動きます。

このペルソナ図鑑は、「職業を調べる資料」ではなく、「人間を立体化するための資料」として利用してください。